私たちの浦和学 ©2024 浦和ガイド会

今回のシリーズは、「浦和といえば」と題し、もっと知りたくなる代表的な１０項目をご紹介していきます。
今月は、特別に第３回目「文教都市」、第４回目「見沼通船堀と見沼たんぼ」を連続して掲載します。

第３回「文教都市」

【浦和といえば 文教都市】

浦和市歌には「夢ほのぼのとさくらそう　教育文化の花の都市(まち)」(歌詞２番）とあり、旧浦和市は教育や文化を街づくりの目標に掲げていました。

浦和青年会議所が、昭和 58~59 年に文教都市をテーマに大規模な調査を行いました。「浦和市は文教都市といわれているが、その特色は？」の質問に対し 浦和在住の有識者たち 128 名は、①学者・芸術家・文化人が多い ②(公民館など生涯学習も含め）教育施設が充実 ③教育の歴史・伝統、有名校　などを挙げています。確かに、閑静な郊外都市浦和には、画家や彫刻家、学者等が多く住み、県立と市立の美術館また県立文書館があり、図書館も数多く充実しています。公民館も利用しやすく、市民の生涯学習が活発です。歴史的には以下のように、師範学校や旧制中学・旧制高校の建設、誘致に力を入れ、教育熱心な気風が今も息づいています。

【教育の歴史・文教都市への歩み】

明治４年(1871)　浦和で最も古い学校 浦和郷学校(現高砂小学校)が開校。
明治６年(1873)　旧浦和宿本陣内に改正局(師範学校の前身) 開設。
明治 11 年(1878) 師範学校校舎が、今の埼玉会館敷地に完成移転。その建物は、開校前に明治天皇巡幸の宿泊所となり「鳳翔閣」と名付けられた。
明治 29 年(1896）現県立浦和高校の前身、第一尋常中学校が開校。
明治 33 年(1900)　現県立浦和第一女子高校の前身，浦和高等女学校が開校。
大正 11 年(1922)官立浦和高等学校(旧制)開校。帝大を目指す全国の学生達に「文教都市浦和」が大いに注目されました。

【文教都市 浦和のレガシー「鳳翔閣」】

埼玉師範学校であった鳳翔閣はその後、県立浦和高女や女子師範の校舎、県立図書館として使用された後に解体され、中央バルコニー部分が浦和博物館に復原されています。

埼玉サッカー発祥の地、埼玉師範にちなみ、浦和レッズのエンブレムにデザイン化されています。

鳳翔閣
（中央部分）

参考文献：浦和市総務部行政資料室編集『図説 浦和のあゆみ』1993
浦和青年会議所『文教都市浦和の将来－市民意識調査報告書―』1984

第４回「見沼通船堀と見沼たんぼ」

今回のテーマである見沼通船堀と見沼たんぼ及び見沼代用水は、私共浦和ガイド会でのガイド先としては、第一位の中山道浦和宿に次ぐ多さとなっています。桜の季節では見沼代用水西縁沿いの満開の桜並木は数の多さもあり大変綺麗なものです。

また夏の８月第四週には見沼通船堀東縁において閘門(こうもん)式通船模様を実際の２分の１サイズの船を使って実演しております。

この地の歴史的背景は、1720 年から 30 年代にかけて元あった八丁堤を切り開いて見沼溜井を干拓し、八代将軍徳川吉宗の命により紀州藩から召し出された井澤弥惣兵衛により新田開発がなされ、見沼たんぼとなりました。これにより幕府では約 5000 石の増収が図れました。

灌漑用の水は 60km 先の利根川(現在の行田市)から引き込み、伏越(ふせごし)や掛渡井(かけとい)等を通しての工事でした。今考えても難しい事業と思われますが、僅か６ヶ月で成し遂げたと言われております。

また、通船堀は 1731 年に造られて西縁と東縁の２ヶ所があります。見沼代用水と芝川との 3mの高低差を木造閘門式運河で水位調整を図り、船を通過させました。船の積み荷の多くは年貢米として芝川から荒川に出て江戸蔵前に向かいました。

現在、江戸時代に船の積み荷や船頭を差配した役目の鈴木家住宅が国指定史跡として江戸時代後期建造物の特徴を伝えております。

この鈴木家住宅のうち、米倉と納屋を公開しています。この倉の中には見沼代用水の造成についての資料があり、掛渡井、伏越についても詳しく説明されていますので一見の価値ありです。
また２分の１サイズに復元した船も公開しています。
公開日は土・日曜日で 10 時から 16 時です。

参考文献：青木義脩著『さいたま市の歴史と文化を知る本』
鈴木家住宅前の解説板

文責：菊地 恵子・栗原 三枝子　　写真：浦和ガイド会　　文責：鈴木 正雄